甲状腺外科草子 100

清少納言の系譜：橘則長と小馬命婦

杉野　圭三

清少納言（966－1025 頃？）の子供は 2 人と言われている。橘則長と上東門院小馬命婦だが、枕草子に子供たちの記述はでてこない。

橘則長（のりなが、982－1034）は、橘則光（965－1028 以後？）との間の子で官位は正五位下・越中守。能因法師の姉妹を妻とし、『枕草子』の写本系統の能因本は、この関係からの伝来とされる。父の則光は和歌が大嫌いと公言しているが、息子は和歌にも堪能であった。

橘則光

相模

家の花を人のこひ侍りければよめる

置く露にたわむ枝だにある物を如何でか折らん宿の秋萩（橘則長、後拾遺 301）

露によりたわむ枝さえあるのにどうして庭の秋萩を折ったりしようか。

上のおのこども、前栽掘りに野辺にまかり出でたりけるに、つかはしける

女郎花（をみなへし）おほかる野辺に今日しまれうしろめたくも思（おもひ）やるかな（橘則長、後拾遺 312）

女郎花が多く咲いている野辺に男たちが出かけた今日心配な思いで野辺を思いやることだ

則長と女流歌人**相模**（998－1061）との関係は有名である。相模は 10 代の頃，則長と結婚するも離別し相模守大江公資の妻となる。その後、離別し祐子内親王に仕える。

相模は、百人一首 65 番「恨みわび干さぬ袖だにあるものを恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ」を含む多数の和歌を残した。

橘則長、父の陸奥守にて侍るける頃、馬に乗りてまかり過ぎけるを見侍りて、以下略

綱たえてはなれはてにしみちのくの尾駮（をぶち）の駒を昨日見しかな（相模、後拾遺 954）、綱が切れて放れた陸奥の尾駮の駒（以前に通ってきた陸奥守の息子のあなた）を昨日見ました。

また、則長の死後に異母弟の橘季通が相模に贈った歌からもその関係性が良く分かる。

橘則長、越にてかくれ侍りにける頃、相模がもとにつかはしける

思ひ出づや思ひ出づるに悲しきは別れながらの別れなりけり（橘季通、後拾遺 560）

上東門院小馬命婦（こまのみょうぶ、生没年不詳、988 年頃出生？）は、清少納言と藤原棟世の娘であることが知られ、一条天皇の皇后・上東門院彰子に仕えた。歌人としての評価は不詳、残された歌は一首のみである。

為家朝臣、ものいひける女にかれがれになりてのち、中略、娘に代りて詠み侍りける

その色の草ともみえず枯れにしをいかにいひてかけふは掛くべき（小馬命婦、後拾遺集 908）

葵とも分からないように枯れてしまっているのに、どのように掛けたらよいのですか？

中宮定子の最側近であった清少納言の娘がライバルと目される彰子に仕えた理由については色々な憶測があるが詳細不明である。

清少納言の夫橘則光は道長派の大納言藤原斉信（967－1035）の家司的存在とされ、道隆派の清少納言との関係が難しくなったのではないかとの推測もある。

小馬命婦の中宮彰子への出仕に際しては、枕草子から伺える清少納言と藤原斉信、橘則光との間の水面下での交流が道長時代にも維持できていた影響があるのかもしれない。

参考資料：岸上慎二、清少納言。

山本 淳子、清少納言と橘則光、決別の理由。

人間文化研究、38, 216－242，2017。

山本淳子：枕草子のたくらみ

（　一甲状腺外科医の徒然なる随想　）

2024 年 5 月 9 日